Yes, No 疑問 たいする応答「ええ、そうです」 いての意味的分析

由本樹子

The Semantic Analysis of "Ee,Sodesu" in Reply to an Yes, No question

Shigeko Yoshimoto

The current study takes a theoretical approach to the analysis of "Ee, Sodesu" in reply to an Yes, No question, such as "Are you a student?" In the previous literatures, the structure of "Ee, sodesu" has been only descriptively explained. In this paper, I will demonstrate that one cannot reply with "Ee, sodesu" in the following two cases:

(1) the question form "A wa B ka"
(a) B is an non-NP.
B receives the focus as its conversationl effect.
(2) the question form "A ga B ka"
(b) B is an non-NP.
A receives the focus as its conversational effect.

【キーワード】質問の焦点、述部の意味的特徴、名詞句の一般的意味的特徴

0. はじめに

本稿では、「ええ、そうです」という応答が、どのような疑問文に対して可能であるかについて考察し、その統語的、意味的、語用的制約について分析する[1)]。

例えば、次の (1) (2) (3) を比較してみると、同じ Yes, No 疑問文であっても「ええ、そうです」の適格性は異なると言える。

(1) a：スミスさんは会社員ですか。
b：ええ、そうです。
(2) a：スミスさんは会社員ではありませんか。
b：＊ええ、そうです。

(3) a：日本語の勉強は楽しいですか。

b：＊ええ、そうです。

(1b) (2b) (3b) は、それぞれの疑問文で聞かれていることを「全くその通りである」と肯定するという話者の意図は同じであると思われるが、「ええ、そうです」の適格性は異なる。本稿では、このような「ええ、そうです」という応答の適格性の違いがどのような理由によって生じるのかを考えて行きたい。

本稿では、「ええ、そうです」が適格となる仮説は以下 (4) のようなものであると考える。そして、(4) が以下のそれぞれのレベル1〜3となって現れ、具体的な例を説明することができると考える。

(4) 質問の焦点が心理的に遠い、客観視されるものであれば、「ええ、そうです」で答えることができる。

「AはBか」型　レベル1..... 質問の焦点Bが名詞（句）ならば適格となる。

レベル2..... 述部Bが「時間軸との強いかかわり」と「主体の心理との強い密着度」という意味的特徴をもつ場合、Bの焦点化が妨げられ適格性が下がる。

レベル3..... 疑問文全体が一つのまとまった機能を果たす場合、適格性が高まる。

「AがBか」型　レベル1..... 質問の焦点Aが名詞ならば適格となる。

レベル2..... 述部Bが「時間軸との強いかかわり」と「主体の心理との強い密着度」という意味的特徴をもつ場合、Aの焦点化が妨げられ適格性が下がる。

レベル3..... 疑問文全体が一つのまとまった機能を果たす場合、適格性が高まる。

Alfonso (1974) に代表される「ええ（はい）、そうです」の先行研究は、概ね上記のレベル1での議論に終始しているといってよいだろう。本稿で提示する仮説は、Brown & Levinson (1987) で提示されている名詞句の一般的意味的特徴「名詞化した表現になるほど、動作主 (actor) が何かをしたり、感じたり、何かの状態であることから遠ざかる。」に基づくものである。

本稿では「AはBか」型と「AがBか」型の肯定疑問文と否定疑問文の例を用いて、仮説を論証していく。

1. 肯定疑問文の場合

1. 1. 名詞文の疑問文について

まず、はじめに名詞文の疑問文と「ええ、そうです」の適格性について考えてみる。名詞文の疑問文の場合、以下の(5) (6) に示されるように「AはBか」型の(5)も「AがBか」型の (6) も「ええ、そうです」が適格となる。

(5) a：スミスさんは会社員ですか。
　　b：ええ、そうです。

(6) a：スミスさんが会社員ですか。
　　b：ええ、そうです。

これらの名詞文の疑問文と「ええ、そうです」の適格性は仮説のレベル1で説明できる。(5) は「AはBか」型のため質問の焦点はB「会社員」で名詞、(5) は「AがBか」型のため質問の焦点はA「スミスさん」で名詞と、質問の焦点がそれぞれ名詞であるため［ええ、そうです」が適格になると言える。

1. 2. 形容詞文の疑問文について

次に形容詞文の疑問文と「ええ、そうです」の適格性について見てみよう。以下の例 (7) (8) をみると、形容詞文の疑問文の場合は「ええ、そうです」で答えるのは不適格あるいは不自然といえる。

(7) a：日本語の勉強は楽しいですか。
　　b：＊ええ、そうです。

(8) a：日本語の勉強が楽しいですか。
　　b：??ええ、そうです。

(7) は仮説のレベル1で解決できる。つまり「AはBか」型で質問の焦点が名詞の場合は「ええ、そうです」で答えられるが、「楽しい」という形容詞の場合、「ええ、そうです」で答えることが不可能である。

一方、(8) は、久野 (1973) によれば［目的格の「が」］に属すると分類できるものであろう。久野は「が」を［総記］［中立叙述］［目的格の「が」］に分類する[2)]。そして、［総記］の「が」以外は「ええ、そうです」で答えられないと考えることもできる。しかし、久野の「が」の分類自体が完全に明確なものではないと思われる。

そこで、ここでは仮説のレベル２に提示した述部Ｂがもつ意味的特徴に注目してみたい。

(8) は「ＡがＢか」型で、質問の焦点はＡの名詞「日本語」にある。しかし、実際には「ＡがＢか」型で述部Ｂ：形容詞の場合、「ええ、そうです」での応答は不適格性が高い。それは、形容詞が述部Ｂにある場合、形容詞の意味的特徴によって、本来疑問文の焦点になるべきＡ：名詞の部分に焦点が当たりにくくなるからであると考えられる。本稿ではその形容詞の意味的特徴とは、「時間軸との強いかかわり」と「主体の心理との強い密着度」であると考える。そこで、まず「時間軸との強いかかわり」について説明を加える。

久野 (1973) は、以下 (9) のような定義を提示している。

(9) a,　［＋状態的］動形詞は、現在時の状態を指し、

　　b,　［－状態的］動形詞は、未来時の状態を指すか、習慣的動作、あるいは普遍的動作を指す。

この久野の定義に基づき、例文 (9a) の形容詞を「これから」をつけることが可能かどうかを検証してみると以下のようになる。

(9a') ＊これから日本語の勉強が楽しいですか。

(9a') から明らかなように形容詞は［＋状態性］であると言える。

次に形容詞がもつ「主体の心理との強い密着度」について述べる。(8a') の疑問文は次の (8a') のように言い換えられる。

(8a') あなたは日本語の勉強は楽しいと思いますか。

(8a) が (8a') のように言い換えられるのは、「楽しいですか」といった形容詞述部が、相手の感情、認知、判断について聞いているからであるといえるだろう[3)]。

ここまで考察してきた形容詞がもつと思われる「時間軸との強いかかわり」と「主体の心理との強い密着度」という意味的特徴は、一部の動詞にも認められ、形容詞の「ＡがＢか」型の場合と同様、「ええ、そうです」の不適格性を引き起こす要素となっていると思われる。以下、動詞文の疑問文について考察していきたいと思う。

1. 3.　動詞文の疑問文について

ここでは、動詞文の疑問文に対する「ええ、そうです」の適格性について考察す

る。まず、継続動詞文の疑問文である (10) (11) について見ると、「A は Bか」型の (10a) にたいしては「ええ、そうです」が不適格であるのに、「AがBか」型の (11a) にたいしては「ええ、そうです」が適格であることが分かる。

(10) a ：ビルさんは日本語の本を読みますか。
　　b ：＊ええ、そうです。

(11) a ：ビルさんが日本語の本を読みますか。
　　b ：ええ、そうです。

(10a) にたいして「ええ、そうです」が不適格となるのは、仮説のレベル1によって説明できよう。つまり、Bが「読みます」という継続動詞であり、名詞（句）ではないからであると言える。また、(11a) にたいして「ええ、そうです」が適格となるのも、仮説のレベル1からみて矛盾しない。つまり、継続動詞「読む」は (10') のように「これから」をつけても非文にならず「時間軸との強いかかわり」をもたないといえる。

(10') ビルさんはこれから日本語の本を読みますか。

また「読む」には「主体の心理との強い密着度」という意味的特徴があるとは考えにくいため、述部の意味的特徴に影響されることなく、質問の焦点は仮説のレベル1に基づいて名詞に当たり、「ええ、そうです」で答えられると考えられる。これと同様の説明は瞬間動詞、継続・瞬間動詞、相互動詞、移動動詞の動詞文にも当てはまる[4)]。

次に述部Bが状態・継続動詞である (12) (13) の例を見てみよう。これらの例を見ると、述部が状態・継続動詞の動詞文の疑問文の場合、「AはBか」型も「AがBか」型でも「ええ、そうです」で答えることはできないと言える。

(12) a ：富士山は見えますか。
　　b ：＊ええ、そうです。

(13) a ：富士山が見えますか。
　　b ：＊ええ、そうです。

(12) の「AはBか」型で質問の焦点Bが状態・継続動詞「見えます」である。したがって、この疑問文が「ええ、そうです」で答えられないのは、これまで見てきた例と同じように仮説のレベル1：「質問の焦点 Bが名詞（句）である」に矛盾するためであると言える。一方、「AがBか」型の疑問文である (13) が「ええ、そ

うです」で答えることができない理由は、形容詞文の場合に参照した久野 (1973) の［目的格の「が」］によっても説明が可能であろう。つまり、(13) の「が」は、［目的格の「が」］で［総記］の「が」ではないので「ええ、そうです」で答えることができないと考えられるからである。しかし、次の非意志的・感情的動詞の動詞文である例 (14) は、久野のいう［目的格の「が」］に属さないと思われる。

(14) a ：こういうの、子供が喜びますか。

b ：＊ええ、そうです。

この (14) の例は本稿で提示した仮説のレベル２によって説明できる。つまり、「喜ぶ」という動詞は (14) のように「これから」をつけると、意味が伝わらない。つまり、現在との結び付きが強い、「時間軸との強いかかわり」があると認められるのである。

(14') ＊こういうの、子供がこれから喜びますか。

また、「喜ぶ」という動作は、主体である子供の感情から出てくる動作であると言える。したがって、非意志的・感情的動詞には「時間軸との強いかかわり」と「主体の心理との強い密着度」の二つの意味的特徴が認められるため「AがBか」型の疑問文であっても質問の焦点がAに当たることが妨げられ「ええ、そうです」で答えることができないといえるのである。ちなみに非意志的・感情的動詞の中には「好む」「怒る」などが含まれる。

そして、久野 (1973) の目的格の「が」によって処理できるとした (13) の例も以下の (13') が正しい意味を伝えないことから述部 B「見えます」に「時間軸との強いかかわり」という意味的特徴があると考えることができる。

(13') ＊富士山がこれから見えますか。

また、「主体の心理との強い密着度」についてであるが、「見える」という動詞は主体の感情とは無関係であるが、意志的でもない。つまり、能動的に意志をもって働きかけることを表す動詞ではなく、主体の心理の中にそういう状況が入り込んでくることを表す動詞であると説明できる。すなわち、状態・継続動詞にも「時間軸との強いかかわり」「主体の心理との強い密着度」の二つの意味的特徴が認められると言えるので、「AがBか］型の疑問文であっても質問の焦点がAの名詞「富士山」に当たることが妨げられ「ええ、そうです」で答えることが不可能になると説明できる。この説明は、仮説のレベル２に矛盾しないといえる。

このように「AがBか」型で述部Bに名詞（句）と相反する意味的特徴をもつ形容詞、動詞がくる場合、質問の焦点が名詞Aに当たることが妨げられるため、「ええ、そうです」で答えることができなくなるといえ、それを示したのが、仮説のレベル2であると言える。

この仮説のレベル2によって形容詞、動詞を「の」によって名詞化した場合の現象も説明できる。以下の節でそれらの例について考察して行きたい。

1.4.　名詞化した形容詞文、動詞文について

ここでは、名詞化した形容詞文、動詞文の疑問文と「ええ、そうです」の適格性について考えてみよう。まず、形容詞文を名詞化した疑問文 (17) (18) を見ると、「A は Bか」型の場合は「ええ、そうです」が不自然になるが、「AがBか」型の場合「ええ、そうです」で答えることができることが分かる。

(15) a ：日本語の勉強は楽しいんですか。
　　 b ：？ええ、そうです。
(16) a ：日本語の勉強が楽しいんですか。
　　 b ：ええ、そうです。

(15) で「ええ、そうです」の許容度が低いことは「AはBか」型の仮説のレベル2によって説明できる。つまり、「AはBか」型で焦点はBの名詞句「楽しいの」にあるが、その焦点である名詞句そのものが前の1.2.でも考察したように「時間軸との強いかかわり」と「主体の心理との強い密着度」という意味的特徴をもつものであるため、質問の焦点のB の名詞句を「心理的に遠い、客観視されるもの」と意識することを妨げていると考えるのである。一方、(16) で「ええ、そうです」が適格となることも仮説のレベル2で解決できる。すなわち、「AがBか」型の疑問文で質問の焦点はAの名詞「日本語の勉強」にあり、述部Bの意味的特徴はAの名詞がもつものとは相反するが、B が名詞句であるためAの名詞の焦点化を妨げるまでの力はないためであると思われる。次に動詞を名詞化した疑問文について見てみよう。

次の (17) (18) のように述部 Bが継続動詞を名詞化したものの場合、「AはBか」型、「AがBか」型にかかわらず、「ええ、そうです」が適格である。

(17) a ：ビルさんは日本語の本を読むんですか。

b ：ええ、そうです。

(18) a ：ビルさんが日本語の本を読むんですか。

b ：ええ、そうです。

(17) は質問の焦点である B「読むの」が名詞句の意味的特徴と相反する意味的特徴をもたない継続動詞を名詞化したものであるため、仮説のレベル1：「質問の焦点は B の名詞句にある」に一致すると言えるので「ええ、そうです」の適格性に問題はない。また、(18) の例も仮説のレベル1で説明できる。つまり、(18) も質問の焦点が A の名詞「ビルさん」に当たることが、述部Bの意味的特徴によって妨げられることがないので「ええ、そうです」が適格になると言える。

以上のように述部 Bが継続動詞を名詞化したものの場合「A は Bか」型、「A が Bか」型とも「ええ、そうです」は適格である。しかし、以下のように述部Bが「時間軸との強いかかわり」と「主体の心理との強い密着度」という意味的特徴をもつ状態・継続動詞を名詞化したものの場合、「A は Bか」型では「ええ、そうです」が不適格となる。

(19) a ：富士山は見えるんですか。

b ：＊ええ、そうです。

(20) a ：富士山が見えるんですか。

b ：ええ、そうです。

この状態・継続動詞を名詞化したものの例は「Aは Bか」型、「Aが Bか」型とも仮説のレベル2 によって説明できる。

(19) で「ええ、そうです」が不適格になるのは、「AはBか」型では質問の焦点はBの名詞句「見えるの」にあるが、そのBそのものが名詞化されてはいても「心理的に遠い、客観視されるもの」という名詞句の意味的特徴とは相反する意味的特徴をもつものであるため「ええ、そうです」が不適格になると考えられるのである。また、(20) では、述部 B「見えるの」が名詞句の意味的特徴とは相反する意味的特徴をもっている動詞であるが、名詞句そのものに焦点が当たっているわけではなく、なおかつ名詞化されているため、質問の焦点 A「富士山」への焦点化を妨げるほどの強さはないと結論づけられる。以上、肯定疑問文について考察してきたが、次章では否定疑問文と「ええ、そうです」の適格性について検討してみたいと思う。

2. 否定疑問文と「ええ、そうです」の適格性

2. 1. 名詞文の否定疑問文について

まず、名詞文の否定疑問文について以下の例について考える。否定疑問文の場合、「A は Bか」型も「Aが Bか」型も、述部 Bが名詞であっても「ええ、そうです」で答えることはできないと言える。

(21) a ：スミスさんは会社員ではありませんか。
　　b ：＊ええ、そうです。

(22) （何人か人がいる中で、一番会社員らしいと aが思っていたスミスさんが会社員ではないとわかった時）
　　a ：スミスさんが会社員ではありませんか。
　　b ：？ええ、そうです。

(21) において「ええ、そうです」が不適格となるのは、「…ありません」という否定疑問文のモダリティが存在動詞「ある（あります）」の否定形であることに起因していると思われる。この場合は仮説のレベル 2 を適用することができる。つまり、「AはBか」型で質問の焦点は B にあるが、Bが存在動詞という「状態性」をもつモダリティを伴っているため、「ええ、そうです」で答えることができなくなると考えられる。また、(22) は、普通の場面で発話された場合「ええ、そうです」は不適格になると思われるが、本来話者が強く驚いているような特定の場面を設定しなければ、発話自体不自然であると思われる。そこで、ここでは (22) のコンテクストに示したような特殊な場面での発話であると仮定した上で「ええ、そうです」の適格性について検討する必要があろう。そして、(22) のようなコンテクストを設定すると、「ええ、そうです」は適格になると思われる。このわけは、述部が「状態性」をもつモダリティを伴ってはいるが、それによって質問の焦点であるはずのAの焦点化が妨げられる以上に、話者の驚きを示すという機能が強く、その機能自体がひとつのまとまりとなってしまい「ええ、そうです」で受けることを可能にする場合があると思われる。これは仮説のレベル 3 に矛盾しないといえるだろう。

2. 2. 形容詞文の否定疑問文について

ここでは述部Bが形容詞の否定形である疑問文と「ええ、そうです」の適格性について見てみよう。次の例 (23) ～ (26) をみると、「ええ、そうです」という応答が「A は B か」型の場合は不適格、「A が B か」型の場合は不自然となっている。ただし、これは、あるコンテクストを与えると許容度が高まるのではないかと思われる。

(23) a ：テニスは楽しくないですか。
　　b ：＊ええ、そうです。

(24) (a はテニスが楽しいと思っており、b が「テニスが楽しくない」と発話したのを聞いて驚きながら)
　　a ：テニスが楽しくないですか。
　　b ：？ええ、そうです。

(25) a ：テニスは楽しくありませんか。
　　b ：＊ええ、そうです。

(26) (a はテニスが楽しいと思っており、b が「テニスが楽しくない」と発話したのを聞いて驚きながら)
　　a ：テニスが楽しくありませんか。
　　b ：？ええ、そうです。

形容詞文の否定疑問文は、仮説のレベル１で処理できる。つまり、「AはBか」型の (23) (25)では質問の焦点 B が形容詞「楽しい」という名詞ではない要素であるため「ええ、そうです」で答えることはできない。その上、本来「状態性」をもつ否定のモダリティ「…ない」「…ありません」が付加しているため、一層「ええ、そうです」で受けることが難しくなっている。しかし、「AがBか」型の (24) (26) のコンテクストによって「ええ、そうです」が適格性が高まることは、仮説のレベル 1、2 では解決できない。すなわち、質問の焦点は名詞A「テニス」でも述部Bが名詞と相反する性質をもつ形容詞＋「ないですか」／「ありませんか」であるため焦点化が妨げられるはずで、仮説のレベル 1、2から見ると矛盾するのである。しかし、これらの例も普通「AがBか」型で Bが形容詞＋「ないですか」／「ありませんか」を用いる場合は、(24) (26) に示したコンテクストにあるような話

者が驚きなど強く伝えたい場合であると考えられ、そのような場合には「ええ、そうです」が可能になるといえる。これには仮説レベル３を適用する必要があろう。つまり、否定疑問文全体がひとつのまとまりとなって意識されているとき質問の焦点が心理的に遠く意識され、「ええ、そうです」が可能になるといえよう。これは、質問の焦点Ａの焦点化が述部Ｂの性質によって妨げられるというレベルではなく、疑問文がそれ全体として捉えられ「ええ、そうです」で答えられることを可能とするという仮説のレベル３の段階であると言い換えることができよう。次に動詞文の否定疑問文について見てみよう。

2. 3.　動詞文の否定疑問文について

ここでは動詞文の否定疑問文と「ええ、そうです」の適格性について考察する。まず、以下の例 (29) (30) を見てみよう。

(27) a ：ビルさんは日本語の本を読みませんか。
　　b ：＊ええ、そうです。

(28) （たとえ他の人は日本語の本を読まなくてもビルさんは読むと思っていたビルさんが日本語の本を読まないということが分かったとき）
　　a ：ビルさんが日本語の本を読みませんか。
　　b ：？ええ、そうです。

(27) (28) はいずれも述部が継続動詞「読む」に否定のモダリティを伴う要素が付加した疑問文である。(27) は「Ａは Ｂか」型であるため、質問の焦点はＢ「読みます」にあり、そのＢが瞬間動詞＋否定のモダリティを伴うもの、つまり名詞 (句) ではないため「ええ、そうです」が不適格になる、つまり、仮説のレベル２を適用できると説明できる。一方、(28) は仮説のレベル３で説明できる。それは、(28) が自然に発話される場面を考えると、(28) のコンテクストに示したような相当強い驚きの場面が思い浮かぶ。すなわち (28) の疑問文全体がひとつの「驚きを示す」というまとまりとして捉えられ「ええ、そうです」が可能になると考えられるのである。

最後に次の (29) (30) の例を見てみよう。

(29) a ：北海道に行きませんか。（上昇イントネーション／誘いかけ）
　　b ：＊ええ、そうです。

(30) a ：北海道に行きませんか。（下降イントネーション／残念な感じ）
　　b ：ええ、そうです。

(29) の場合、文全体の機能は「誘いかけ」であり、聞き手にたずねることが目的であると言える。したがって、質問の焦点は述部 B：「行きませんか」にあると考えられる。そのため「ええ、そうです」は不適格になるといえるだろう。しかし、(30) の場合は (29) と文は同じであるが、イントネーションを下降にすることによって「誘いかけ」という問いかけではなく「残念な感じ」を聞き手に伝えるという機能をもつといえるだろう。つまり、(30) の場合は疑問文全体がひとつのまとまりをもった機能を果たし、「ええ、そうです」という応答を可能にさせると考えられる。

3. おわりに

これまで例文を考察しながら検証してきた「ええ、そうです」についての仮説を提示した。その仮説は、(4)「質問の焦点が心理的に遠い、客観視されるものであれば、「ええ、そうです」で答えることができる。」というものである。そして、その仮説は「A は B か」型、「A が B か」型のそれぞれの疑問文において三段階で現れる。第一段階は、質問の焦点が名詞（句）であれば「ええ、そうです」が適格となる。つまり、「AはBか」型ではB、「AがBか」型ではAが名詞（句）であれば「ええ、そうです」が適格となる。これを本稿ではレベル1と呼んだ。第二段階としては、たとえ質問の焦点が名詞（句）であっても、質問文の述部Bが「時間軸との強いかかわり」「主体の心理との強い密着度」という意味的特徴をもつ場合、質問の焦点である名詞への焦点化が妨げられ、「ええ、そうです」の適格性が下がるといえる。これを本稿ではレベル２と呼んだ。そして、第三段階としては疑問文全体がひとつの何らかのまとまった機能を果たす場合、「ええ、そうです」の適格性が高まると言える。これを本稿ではレベル３と呼んだ。そして、これらの３つの段階で現れる仮説は、全て前に提示した (4) から派生してくるものであると結論づけることができよう。

以上、「A は B か」型、「Aが Bか」型の疑問文とそれに対する「ええ、そうです」の適格性に関して、意味論的な分析を中心に述べた。また、本稿ではレベル３で説明できる例の考察に多くの紙面をさけなかった。次回への課題としたい。

Yes, No 疑問文にたいする応答「ええ、そうです」についての意味的分析

参考文献

井上　和子（編）(1989)『日本文法事典』(大修館)
奥津敬一郎、大島　資生他　(1990)「Yes, No 疑問文に対する日本語学習者の応答ー中国語・朝鮮語話者の場合ー／分析編」井上和子（編）『日本語の普遍性と個別性に関する理論的及び実証的研究』久野日章 (1973)『日本文法研究』(大修館)
高橋　太郎　(1984)　「名詞述語文における主語と述語の意味的な関係」『日本語学』12月号
寺村　秀夫　(1982)　『日本語のシンタクストと意味　第1巻』(くろしお出版)
仁田　義雄　(1991)　『日本語のモダリティと人称』(ひつじ書房)
野田　尚史　(1987)　「『は』と『が』」寺村秀夫他 (編)『ケーススタディ日本文法』(桜楓社)
野川　英雄　(1989)　「現代日本語の形容詞分類について」『国語学』158集　国語学会
益岡　隆志・田窪　行則 (1992)『基礎日本語文法改訂版』(くろしお出版)
森田　良行　(1968)　「動作・状態を表すいい方」『講座日本語教育　第4分冊』(早稲田大学教育研究所編)
吉川　武時　(1989)　『NAFL選書6・日本語文法入門』(アルク)
Anthony Alfonso (1974) Japanese Language Patterns. vol. 1, 2. Sophia University L.L.Center of Applied Linguistics.
Brown.P & Levinson.S (1987) Politeness:some universals in language usage. Cambridge University Press
Haruko Minegishi Cook(1987)Social Meanings of the Japanese Sentence Final Particle NO Papers in Pragmatics 1. No. 2.
Naomi Hanaoka McGloin (1978) On the Assertive Predicate NO DESU in Japanese. CLS vol. 14
Seiichi Makino & Michio Tsutsui (1986) A Dictionary of Basic Japanese Grammar 日本語基本文法辞典　The Japan Times

《脚　　注》

1) 本稿は1995年1月神田外語大学大学院に提出した修士論文に手を加えたものである。論文指導の徳永美暁先生をはじめご助言いただいた諸先生方に心から感謝したい。
2) 久野の「が」の分類の詳細については久野 (1973) を参照
3) 森田 (1968) 参照
4) 動詞分類の詳細は Seiichi Makino & Michio Tsutsui (1986) を参照